

JOCV千葉OB会報

2014 年 1 月
No. 85

新年号

1. 年頭所感

新年明けましておめでとうございます。

いよいよソチ冬季オリンピックとサッカーワールドカップの年明けです。日本の活躍が楽しみです。はてさて我が青年海外協力隊千葉OB会の活躍や如何？JOCVOB会活動はもともと地味な活動ですから、華々しく何かをするものではありませんが、2年前に存亡の危機にあった千葉OB会をなんとか立て直さなければとの思いで、会長を引き受け、無我夢中でやってきました。それにしても嬉しいことに最初の1年と2年目では天と地の開きがあるくらい活動が活発化してきました。要因ははっきりしています。OB会活動に関わるOB/OGの方々の数の増加と若手の活躍です。やはりOB会は若い人が元気に活動しなければ活性化しません。

2013年を振り返ると、充実の1年であったと実感しています。まずは、3月から再開した協力隊ナビ、浦安市国際センターで毎月第4土曜日の午後開催しましたが、応募相談者ゼロの月はなく、6名が最多でしたが、毎月複数の相談を受け、めでたく合格者まで生み出すことができました。現在も秋募集の応募相談者への応募者調書作成へのアドバイスなどを継続しており、一人でも多くの協力隊志願者が合格できるようにサポートしたいと思っています。浦安は東京からのアクセスが良く、ホームページを見て東京から来る相談者もいます。10月にはJICA、外務省主催のグローバルフェスタ2013にも久しぶりに出店しました。例年通り日比谷公園で開催されましたが、生憎の天候にもかかわらず大勢の来訪者があり、当会は途上国の民芸品販売や協力隊への応募相談を行いました。詳しくは担当からの記事掲載がありますので、そちらをご覧ください。

新たな活動としては、南柏にある麗澤大学との連携講座の開始です。当会の副会長でもある成瀬猛教授（昭和52/1後、シリア）が担当する国際交流・国際協力講座の一環で、いわゆる出前講座のようなものです。前期は基礎演習として3コマ、ボランティア論で2コマの計5コマを実施、後期は基礎演習の2コマを実施しました。1コマ90分で、1年生を対象にした授業でしたが、若手主体の講師陣のプレゼンテーションは素晴らしく、学生たちは姉さん兄さんくらいのOB/OGの話にしっかりと耳を傾け熱心にメモなども取っていました。講義後の質疑応答では、国際協力分野への就職や協力隊参加への道などについての質問もあり、活発な意見交換もありました。また、麗澤大学の3年生はミクロネシアへ研修旅行に行った者もあり、海外を身近に感じてもらったのではないかと思います。

最後は会報の発行です。本年度は嬉しいことに1年間に2回も会報を発行することができました。これもJOCVナビ同様に再開なのですが、昭和59年5月に第1号を発行して今回は第85号になります。発行に際しては広報担当の鳥飼恵美子OG（平成15/1、マーシャル）の頑張りに負うところが大きのですが、初めての試みとして派遣中隊員に寄稿していただくことにしました。これもOB会活動の活性化の一環です。派遣中隊員は帰国すればOB/OGとなり、是非ともOB会活動に参画してほしいと願っていますから、派遣中からOB会活動へ接点を持っていたらこうと思って始めました。また、新企画として今年からは「帰国隊員は今（仮称）」と題して千葉県内で頑張っているOB/OGから寄稿していただくことを計画しています。いずれにしてもOB会活動は土日ボランティアの活動ですから、無理なく、できる人が出来ることをできる範囲内で継続してやって行くことが大切だと思っています。

最後に、国際協力事業に長年携わってきた私が在外勤務中に事務所便りなどで隊員などにいつも言ってきた言葉の頭を少し変えて、年頭のご挨拶とします。
「OB会活動」は、明るく、元気に、そして楽しく！ 皆さん、今年も頑張りましょう！



アンボセリにて

青年海外協力隊千葉OB会
会長 浜田 眞一
(昭和51年度2次隊前期)

～お知らせ～

平成26年度総会の開催

下記の日時で総会を実施しますので、是非ご参集ください。

日時：平成26年4月19日（土） 14:00～15:30

場所：浦安市国際センター（JR新浦安駅下車徒歩1分）

ホームページのご紹介

当会ホームページにて、定例会/協力隊ナビ/講演会/懇親会等、各種イベントのスケジュールや、活動報告を掲載しています。

URLは下記ですが、「青年海外協力隊千葉OB会」で検索していただくこともアクセスできますので、是非ともご覧ください。

青年海外協力隊 千葉OB会 ホームページ：<http://www.jocvchiba.net/>

目次

1. 年頭所感（会長挨拶）
2. グローバルフェスタ 参加報告
3. 現地活動レポート

24-2 タイ	日本語教師	大石忍	: 市川市
24-1 モロッコ	体育	笹子悠歩	: 館山市
23-4 ジブチ	青少年活動	山田輝之	: 八千代市
24-2 エチオピア	理数科教師	臼井朝輝	: 船橋市
24-1 ガーナ	小学校教諭	加計幸雄	: 富里市
24-1 ザンビア	理数科教師	兵頭潤	: 浦安市
23-4 タンザニア	PC インストラクター	津田淳	: 君津市
24-1 南アフリカ	小学校教諭	吉野太郎	: 茂原市
24-1 ペネズエラ	音楽	小松佳央梨	: 千葉市
24-1 コロンビア	小学校教諭	藤岡摩矢	: 千葉市
23-4 パラグアイ	看護師	白川良美	: 市川市
23-4 バングラディシュ	感染症対策	櫛田恵利	: 八千代市
24-1 バングラディシュ	感染症対策	實川路可	: 四街道市
24-1 セネガル	村落開発普及員	田中昌	: 我孫子市
24-1 タンザニア	看護師	鎌田佳春	: 千葉市

4. OB 著書紹介（成瀬 猛 OB）



2. グローバルフェスタ 参加報告

～千葉県青年海外協力隊 OB 会 グローパスフェスタ参加！～

10 月 5 日（土）、6 日（日）に日比谷公園で行われたグローバルフェスタに参加致しました。

小雨降りしきる土曜日、時折晴れ間を見せた日曜日一両日併せてたくさんの方が来てくれて、千葉県 OB 会も大いに盛り上がりしました。千葉県 OB 会では、OV から集めた途上国物品の販売やパプアニューギニア、ケニアのコーヒー試飲、さらに協力隊ナビを行いました。

【途上国の物品販売】

アジアから大洋州、さらにはアフリカのものまで、世界各国の物品が集まりました。多くの方が物品に目を留めてくれました。特に、スリランカで作られた民芸品が大人気でした。大洋州のネックレスや木彫りのクラフトなどもブースに来てくださった人の目を惹いていました。ここでの売り上げは、全て東日本大震災で被害を被った旭市に寄付されます。

【コーヒーの試飲】

パプアニューギニアとケニアのコーヒーの試飲を行いました。特にパプアニューギニアのコーヒーは口にすることがない人が大半であり、様々な人が足を止めてコーヒーを味わっていました。また、昔パプアニューギニアにいた元隊員の人も懐かしい味がするとびっくりと、コーヒーの試飲はグローバルフェスタに来場したたくさんの人を楽しませることができました。

【協力隊ナビ】

大学生や社会人、さらには、高校生と、幅広い年代の人が協力隊ナビに参加してくれました。ブースの関係上、立ち話になることも多かったのですが、協力隊とは何か、国際協力とは何か、さまざまな質問が千葉県 OV へ投げかけられました。未来の協力隊へ、少しは千葉県 OV として役に立てたのではないでしようか

千葉県協力隊としては 2 年ぶりの参加。これは一つの挑戦でした。若い OV と経験のある OV が一丸でした挑戦です。

さまざまな人にお手伝いを頂いて、無事にこの挑戦を成功させることができました。また、千葉県ブースに立ち寄ってくれたたくさんの千葉県 OV の皆さんからも多くの応援を頂きました。これも挑戦を支えてくれた大きな励みでした。みなさん、本当にありがとうございました！

これからも千葉県 OB 会は様々なことに挑戦をしていきます。グローバルフェスタはその第一弾にすぎません。第二弾、第三弾と、千葉県 OB 会として様々な挑戦をして、千葉県 OB 会を盛り上げていきます！皆さん、これからも応援をよろしくお願いします！

22-4 パプアニューギニア 村落開発普及員 高梨 直季



JOCV の活動について説明する高梨 OB



コーヒー試飲の準備

3. 現地活動レポート

小さな芽

24-2 タイ 日本語教師 大石忍 市川市

種を蒔いて芽が出た。小さな可愛らしい芽が出たのを見つけた。そんな時どんな気持ちになるだろうか。誰だって嬉しく感じるだろう。「あ！」とか「出た！」とか、「やったー！」と喜ぶだろう。しかし、大切なのはこれからだ。芽が出てからどうやって育てていくかで、しょうらい開く花の質が決まるのではないだろうか。ここで活動をしているうちにそんなことを思うようになった。



日本語の教室

私の配属先は、タイ国中央部パトゥムターニー県にあるタマサートクロンランウィタヤコム学校。全校生徒4300名、そのほとんどの生徒さんがタイで名が知れているタマサート大学進学を希望する大規模進学校だ。日本語を勉強しているのは高校1年生から3年生までの専攻クラスの生徒約150名。各学年1クラスずつ（1クラス約50名）である。CPはこの学校で20年近く教えている大ベテランの先生2名。CPたちの意向により、日本語の授業は「日本語が好きで、本気で日本語を勉強したい!」という生徒だけに開講しているという。その為、高校生の専攻クラスの生徒だけが日本語を勉強している。ほとんどの生徒がアニメ・漫画をきっかけにして日本語に興味を持つようになったという。

初めてこの学校に来たとき、非常に驚いた。授業時間通りに教室に来て、きちんと勉強の準備をしている生徒たち。ほぼ毎時間行われる漢字や単語の小テストに真剣に取り組む生徒たち。そして、休み時間や放課後に一生懸命日本語を使って話しかけてくる生徒たち。日本語を学習している生徒の数は少ないけれど、彼らには勢いがあった。もちろん完璧に話せるわけではない。何回か聞き直してタイ語や英語を交えて通じ合う、ということも少なくない。しかし、この学校の生徒は「芽が出ている」、そう感じた。この先立派な花を咲かせる為に彼らの芽をどうやって育てていけば良いのか毎日試行錯誤しながら活動に取り組んでいる。受験に必要な日本語を教えること、もちろんこれも大切であるが他にもっと大切なことがある。「学ぶ楽しさ・喜び」を感じながら勉強を続けて欲しい。その為、一緒に楽しい活動をする、そしてこれまで生徒たちが地道に勉強してきたことが実践として活かせる場を作ること为目标に活動に取り組んでいる。例えば、七夕や日本料理作りをはじめとする日本文化・行事の紹介・体験をした。日本人の友達を学校に招き生徒と話をする機会を設けた。また、JICA主催のスタディーツアーの受け入れ校として日本人大学生25名と高校2年生・3年生の交流プログラムを実施した。語学は教室の外で自分の力で使えるようになった時に、本当に自分のものになる。そして、それは自信に繋がる。自分の力が信じられる時、人は何でもできる。日本語の生徒はこれまでも今も一生懸命勉強している。みんな力を持っている。だから私は、生徒が自分の力を信じられるようになる、そのお手伝いをしたいと思う。

私自身も経験少なくここに来て、生徒や周りの先生方に育てられながらここまでできた。生徒たちと共に、強かで綺麗な花を咲かせることが出来るように、残りの任期も精一杯取り組んでいこうと思う。



学校で七夕体験



日本人学生との交流

何もないけど、全てある
～厳しい自然環境の中で生きる人々～

24-1 モロッコ 体育 笹子悠歩 館山市



モロッコ リフ山脈の麓にある筆者の任地「テトゥアン」

日本から西へ約1万キロ、国土は日本の約1.2倍、人口は約4分の1、「日の沈む国」と呼ばれるモロッコ。映画の舞台ともなったアフリカ有数の世界都市である「カサブランカ」や、ジブラルタル海峡を挟んで対岸にスペインを見ることのできるアフ

リカ大陸の玄関口「タンジェ」を有する。そのタンジェから南東へ約60キロ、リフ山脈の麓にある小さな町「テトゥアン」が私の任地である。地中海沿いに位置するこの町は、20世紀前半にはスペイン領になったこともあり、白壁造りの町の雰囲気は南スペインのアンダルシア地方にどことなく似ている。



海産物が豊富なアフリカ大陸の玄関口「タンジェ」

そんな私の任地での活動は、小学校における体育教育の充実。今は1週間に小学校を10校巡回しながら活動を行っている。日本の小学校のような土のグラウンドはなく、体育用具もあまりないため、限られたスペースの中で、ペットボトルや布の切れ端などを利用して工夫して授業を行っている。日本のようにもっと用具があれば・・・もっとスペースがあれば・・・言い始めたらキリがないが、それでも子ども達は初めての体育に大はしゃぎで、ボランティア活動に行き詰まっている時に、子ども達の笑い声に出会えると、沈んだ気持ちも吹き飛んでしまう。

モロッコの小学校は、お屋前になるとたくさんの人が校門の前に子どもを迎えに来ており、お昼は先生も生徒も全員家に帰って、家族と一緒に食事をする。モロッコの人々は家族をとて大切にしている。親子一緒に買い物に行く姿、年配の女性に優しく接する若者。これらはモロッコでは日々目にする光景だが、日本から来た私にとってはとても印象的である。

また、モロッコの人々は挨拶を欠かさない。活動先の先生や生徒、アパートの管理人、近くの商店へ買い物に行った時など、みんなが笑顔であいさつしてくれ、そのまま世間話をするのも珍しくない。人と人の距離が非常に近いのだ。そして些細な事でも大声で笑う。初めは何がそんなに面白いのか分からなかったが、モロッコで一年以上過ごした今は分かる。面白ければ生き生きとした表情で笑う。小さなことでも大きな幸せを感じながら生活しているモロッコ人から、日々学ぶことは多い。

大都市には大型スーパーもあり、たくさんの物が溢れ、電気や水道も安定しているモロッコは、一見豊かな社会に見えるかもしれないが、それはほんの一部にすぎない。日本から来た私達だからこそ、現地の人と共に生活し、同じ目線で活動できるJICAボランティアだからこそ、気づくこと、できることはたくさんあると思う。日本と比べたらまだまだ「不便だな」と感じることは多い。しかし、ここで貧しくも精一杯の幸せを感じて生きている人がいる。ここには日本にはない物がある。「何もないけど、全てある。」と先日帰国した隊員が言っていたが、まさにその通りだと思う。

夏には50度を超え、特に南部は厳しい気象条件であるこのモロッコで、残された期間の中で自分自身にできることは少ないかもしれないが、貧しいながらも精一杯生きる人たちのたくましさ、雄大な大地のパワーを感じながら、この国の発展を今後も見守っていききたい。



笹子隊員（サハラ砂漠にて）

世界一暑い国、ジブチ

23-4 ジブチ 青少年活動 山田輝之 八千代市

（1）隊員活動に関すること

配属先概要

配属先名：NGO家族保護協会

女性省管轄の1996年に設立されたNGOで、UNHCRからの援助でソマリア、エチオピアからの難民に対する社会活動面での支援を行っている。ジブチ市とアリサビエ市に事務所を持ち、アリアデ、ホルホルの2箇所の難民キャンプで活動を展開している。主な業務は、難民（首都難民を含む）への援助物資配給管理、要望調査、社会活動支援である。私は、2010年にアリアデ難民キャンプに新設された青少年センターにおいて、青少年（6～15歳程度）を対象とした活動を行っています。



世界難民デーで国歌斉唱、国旗を披露するソマリアの子どもたち

実際に行った活動内容

- ①スポーツ活動（サッカー、バレーボール、卓球の各種大会の定期実施等）
- ②HIV対策啓発活動（HIVと体の免疫のしくみの理解、コンドームの利用促進を目的とした啓発劇等）
- ③情操教育活動（英語の振りつきの歌、折り紙、絵画、児童画コンテスト参加等）
- ④社会活動（世界難民デーでの難民問題啓発のためのスピーチ、国旗づくり、国歌合唱隊等）
- ⑤ものづくり活動（難民孤児、障害児を対象とした生活向上のためのおみやげプロジェクト等）

⑥青少年センターの運営改善（備品管理、利用ルールづくりなどの環境整備等）



世界エイズデーで啓発劇を演じてくれた子どもたち

日常生活全般

毎週、活動のためバスで片道約4時間かけて地方のアリサビエ市に移動する。これだけの時間をバスの中で過ごすのは人生初の経験。毎週なので、体力的にかなりきつい。しかし、これぞ協力隊といった雰囲気はある。

（2）任国に関すること（食べ物、習慣、旅など）

ジブチは、1977年6月27日、フランスから独立。ソマリ系イッサ族とエチオピア系アファール族が主要民族である。

食べ物

フランス植民地時代の名残を残しており、安くておいしいバゲットパン（細めのフランスパン）やガレット（そば粉を使ったクレープ）などがある。古くからエチオピア、アラビア半島との交流もあることから、エチオピア、イエメン料理など他国の料理もある。しかし、主食はパスタやご飯に豆などのソースをかけ、肉や野菜を乗せたワンプレートのものが多く、ジブチ料理というものは一見してない。独特な食文化としては、ラクダ肉や子ヤギ料理があることくらいだろう。

習慣

なんと言っても覚醒作用のある植物、カットだろう。東アフリカ一帯のアフリカ人に親しまれているものらしく、ジブチ成人男性はほぼ間違いなく常用している。ジブチでは合法として扱われている。3度の飯よりカットが大事という様子だ。

旅

ジブチの主要な観光地は2つの塩湖である。まず、エチオピアとジブチの境にあるアベ湖。映画「猿の惑星」のロケ地として有名。次に、ジブチ内陸にあるアッサル湖。噂では、死海よりも塩分濃度が濃いのだとか。ジブチは、紅海とインド洋の交わるところに位置し、澄み渡る青空ときれいなエメラルドグリーンの海も魅力の一つである。観光客が少ないことから、隠れたダイビングスポットでもあるようだ。

（3）その他

ジブチは、世界一暑い国と言われるように、乾燥気候であり、一年を通して季節は夏しかない厳しい自然環境である。7月から9月の酷暑期には、日中の気温が50度を超えることも珍しくない。このような環境で2度の酷暑を経験した今、気温が25度前後でも寒いと言ってしまふ。日本の冬は恋しいけれど、自身の体感温度が変わっているのだから乗り越えられるか今から不安だ。ジブチの酷暑を経験したからこそ、日本の四季の素晴らしさに気付き、人間の生活には季節の移ろいが必要だと実感した。ジブチの自然の厳しさから、自分は日本人であることを改めて教えられた。



ソマリア難民の女の子がくれた名前入りのミサンガ

合い言葉はインニブラ

24-2 エチオピア 理数科教師 臼井朝輝 船橋市

皆様エチオピアといえば何を思い浮かべるでしょうか。コーヒー？マラソン選手？おそらく多くの人はこの国がどこにあるかも知らないでしょう。東アフリカにあり、首都のアディスアベバは標高3300mの高地に存在し、赤道近くにありながら年間を通して15度くらいと比較的過ごしやすい気候を持つ。世界最貧国のひとつで、GDPは約日本の100分の1。そんな国エチオピアで私は活動しています。



サイエンスキャンプ

「インニブラ！インニブラ！」こちらの人はよくこの言葉を使います。これはエチオピアの言葉で、一緒に食えという意味です。町を歩くと、とにかくよく聞くのがこの言葉。買い物なんかでお店に寄ったときちょうどお店の人がご飯を食べていると、お前も食えとよくお昼ごはんに誘われます。驚いたことに子供もよく自分のおやつを分けてくれたりします。時々謎の木の実をくれたりすることもあります。

子供が言うのだから大人だって「インニブラ」言います。エチオピアの伝統料理、丸いインジェラをみんなで囲んで「お前彼女いるのか、いないんだったらこいつと結婚しろ」などと冗談で盛り上がります。なれなれしいといえどもそれまでですが、こんな暖かくて優しいエチオピアの人が好きです。

もしあなたがエチオピアに来てこの言葉をかけられたら、勇気を出して一緒にご飯を食べてみてください。腹壊したっていいじゃない。私はそんなあなたに「頑張れ」と無責任なエールを、どこからか送らせていただきます。



ご飯をご馳走になる

ガーナの青空の下で

24-1 ガーナ 小学校教諭 加計 Tungteiya 幸雄 富里市

はじめまして。ガーナに派遣されております加計 Tungteiya 幸雄と申します。このガーナ名は、赴任当初の出張時に、ある校長先生がつけてくださいました。トゥンティーヤと読み、「蒔かれた種が芽を出し、その植物が広がっていく様子」を意味するそうです。自分の活動を表現するかのようで、とても気に入っています。早いもので、赴任から1年4ヵ月が経過しました。私は、現職教員特別参加制度で派遣されており任期が一般隊員より3ヵ月短いので、一日一日を大切にしていきたいと思いつつ活動しています。

私の任国ガーナは、旧英国領で英語が公用語です。西アフリカにはフランス語圏が多く、ガーナだけが英語、という感じがします。しかしながら、現地の方々はそれぞれの地域の現地語を日常会話で使っています。私の任地のタマレでは、「ダバニ語」です。学校の授業は英語で行うこととなっているため、授業中は英語を話しています。また、長距離移動で、他の地域言語の人と話すときにも英語が使われます。



加計隊員

日々、タマレ市教育事務所の一職員として地域の小学校を巡

回指導する活動を行っています。ガーナの人々は、とてもおだやかで、すてきな方々ばかりなのですが、学校現場では残念ながら、問題が山積しています。教育事務所では毎週会議が開かれ、問題点を話し合っていますが、その中でも最も話題になるのが、教師の勤務態度の問題です。実際、教師の欠勤、遅刻は多く見られますし、出勤していても木陰で休憩したり、おしゃべりをしたりして授業をきちんと行っていない教師もいます。教師達は、教科書が配布されない、教室や机などの設備が不十分、教員の人員が不足している、といった予算面での要望をしており、それら一つ一つも理解できるのですが、今現在ある人材が十分活用されていない状況では、たとえ予算を増やしたとしても、十分な効果は望めないのが現状です。

これらの状況を改善するために、自分の教員経験を生かそうと考え、巡回時には、校長をはじめとする教師達に教育の重要性を説いたり、教師の勤務状況について指導したりしました。しかしながら、現状に満足している教師達は、言い訳に終始するばかりで、改善しようとする教師は一握りでした。これには、私自身が、相手方を十分理解していないことが原因でもあったと考えられました。そのため、頭ごなしに指導するのではなく、聞き役に回り、じっくりと話を聞くことに気を配りました。その結果、各校の校長や教師達と良好な人間関係を築くことができ、その後の活動がスムーズに進むようになりました。

また、主要任務である「モデル授業の展開」にも力を入れています。ガーナでは、小学校においてもまるで大学での講義のように、「教師が一方向的に話すだけ」という授業がまかり通っています。教材や教具を提示したり、児童・生徒が主体となって活動したり、といった日本では当たり前の授業が、ほとんど見られないのが現状です。そのため、私が授業をする際には、自作の教材・教具を用意して臨んでいます。また、児童・生徒に考えさせたり、教師と子どもとの双方向のやりとりを大切にしたり、児童・生徒が主体的に活動する場を設けたりするようにしています。教材・教具は、基本的に自作しており、市販の教材は使わないようにしています。これは、高価なものを使ってしまうと、「先進国だからできるんだ。」という誤った考え方を植え付けてしまうからです。もちろん、理科の豆電球など、どうしても現地では手に入らない物もありますが、地域にあるものだけでもほとんどの教材は作れることを示すようにしています。自分は、廃材、ゴミをなるべくとっておくようにしています。空き箱、厚紙、竹串、ボトル、キャップなどはさまざまな教材・教具へと変身します。実際に教材・教具を使うと、子どもたちはわくわくと目を輝かせながら、授業に参加してくれます。また、授業後には、教材・教具紹介ワークショップを開き、教師達にどのように作ったかを説明しています。その中ず、これらは主にゴミとして捨てる不要な廃材から作ったのだということを説明し、「十分な予算がなくても教材・教具は作れる」ということを伝えるようにしています。

また、私のモデル授業では、「学習ゲーム」を活用するようにしています。ガーナでは、授業の中に学習ゲームが登場することはほとんどないため、子どもたちは大喜びで、自然と学習態度も積極的になります。例えば、たし算の学習では、楽しくボーリング遊びや輪投げ遊びをやりまふ。その後、得点を計算

させると、勝敗が絡むため真剣に計算しようとしします。「 $4 + 8 + 10 + 7 + 5 =$ 」を計算しなさい。」とただ指示するだけの授業よりも、意欲が数倍高まります。かけ算では、九九を音楽のリズムに合わせて暗唱したり、ルーレットを用いたかけ算ゲームをしたり、フラッシュカードを用いたカルタやクイズを楽しんだりしています。

実際に触れさせたり、計測させたりする学習活動にも力を入れています。例えば、平面図形は黒板でもなんとか指導できますが、立体図形はそうはいきません。厚紙やストローで作った模型を見せ、実際にさわらせることで、子どもたちの理解が深まります。その上で、図形名称当てクイズをしたり、図形の特徴について考えさせたりしています。算数においては「量感」をつかむことが重要ですが、講義形式の授業ではどれくらいの量であるかは実感させることができません。自分の授業では、自作の紙メジャーや身長計を用いて、長さを計測させたり、体積・容積を理解させるために、容器に水を入れて比較させたり、といった実際の学習活動を行わせています。

私の授業を参観した教師達は、こんな授業の仕方があるのか、と驚き、是非また来てくれと声をかけてくれます。限られた材料で教材・教具を作ったり、バイクで運んだりするのは思いの外大変で、いろいろと難しい面もあり、苦労は多いのですが、子どもたちや教師の目が輝くを見ると、「授業をしてよかった。ガーナに来てよかった。」と心から思います。

生活面では、頻繁に起こる断水や停電、猛烈な暑さ、ハマターン（サハラからの風塵を伴う乾熱風）、住居の不具合等々、大変なことは尽きませんが、今ではすっかり慣れてしまいました。食事も、簡単な日本食を自炊することもあります。現地の食事に慣れたことで、ワチュ（ガーナ版赤飯）やTZ（トウモロコシの粉を餅のようにしたもの）などを毎日おいしくいただいています。

ガーナでは、たくさんの人々に支えられていることを実感しています。JICAガーナ事務所の方々をはじめ、配属先のタマレ市教育事務所の方々、タマレの人々、ボランティア仲間にはいつも勇気と元気をいただいています。また快く送り出してくださった千葉県の方々、JICA本部の方々にも感謝しております。日本に残してきた妻と息子、娘にもたくさん心配をかけました。お世話になった方々のことを忘れることなく、帰国後には、ガーナで学んだことを少しでも還元できるよう、より一層努力を重ねてまいりたいと思っています。



授業風景

7 3の部族が生活するザンビア

24-1 ザンビア 理数科教師 兵頭潤 浦安市

平成24年度1次隊で理数科教師としてザンビアに派遣されている兵頭潤と申します。千葉県の公立学校の教員として現職参加をしています。小学校から大学まで千葉県にある学校を卒業し、千葉県を愛する生粋の千葉県人です。



生徒と兵頭隊員

ザンビアには73の部族があると言われており、その数だけ言語があります。主要な現地語は5つほどあります。そもそもザンビアは周りの国から移住してきた民族からできた国と言われています。公用語が英語であることや、他の民族の文化を受け入れるザンビアの国民性が、この国の特徴でもあります。アフリカの中で最も平和な国と言われることもあり、ザンビア人も自分の国が平和であることを誇りに思っているようにも感じます。

私の配属先は、首都から300kmほど離れたンドラという場所にある、ファティマ女子セカンダリースクールという学校です。タウンから少し離れた寮制の学校で、ガバメントスクールであるものの、カソリック教会が運営するという特殊な学校です。学校にも教会があり、宗教が社会に大きく影響していることを感じさせられます。また、ザンビアでも10番以内に入ると言われるくらいの優秀な学校です。日本の生徒と比べても、極めて高い学力を持っているように感じます。私の活動内容は、主に化学の授業の担当ですが、それに加え、専門性を生かした実験指導や実験室の管理、その他多くの雑用(?)をしています。



学校の図書室

私が住んでいる場所は、ティーチャーズコンパウンドという学校に併設された教員住宅です。雨が強く降ると必ず停電します。同僚たちは私と家族のように接してくれています。毎日同僚とザンビア食を食べており、主食はシマと呼ばれるメイズを加工したものです。夕飯に米を食べることもあります。おかしは、野菜がメインで、レイプ・カレンブラ・チャイニーズキャベツ・チワワ・オクラなどです。あわせて、鶏肉・豚肉・牛肉、川魚、大豆、卵などをタンパク源としています。日本ほど食文化が豊かではありませんが、家庭や地域によって料理に違いがあります。

ザンビア人は落花生（グラウンドナッツ）が大好きですが、千葉県も落花生が有名です。私は化学を担当しているので、千葉県のヨウ素の産出量が世界 2 位であることもあわせて宣伝しています。ザンビア人の名前で Chibale という方がおり、読み方も「チバレ」であるため、名前を憶えやすいみたいです。

残りの任期もわずかですが、「今だからできること」を活動のモットーにして任期を無事終えるまで頑張りたいと思います。



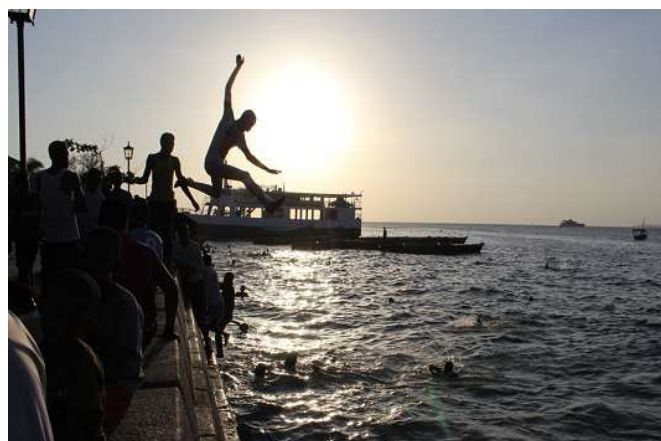
学校のダイニングホール

23-4 タンザニア PC インストラクター 津田淳 君津市

私は東アフリカのタンザニアに PC インストラクター隊員として派遣されています。私の任地はタンザニア本土からザンジバル海峡を隔てた場所にあるザンジバル諸島のひとつ、ウングジャ島です。同島は世界遺産でもあるストーンタウンを有し、夕日の名所としても有名で、ヨーロッパを中心に世界各国から観光地として多くの人が訪れる美しい島です。また同島の現地住民の 9 割以上がイスラム教徒という、タンザニア本土とは全く異なった文化をもっており、島の雰囲気はアフリカというよりはアラブに近い印象を受けました。日々の生活にもイスラム教が浸透しており、信仰行為の一つである礼拝は、仕事などを差し置いて何よりも優先される儀式で、仕事優先の日本社会と大きな違いを感じます。

現地での生活状況は、昔貿易の拠点だったということもあり、外からたくさんの物資が入ってくるので物について困ることはほとんどありません。しかし水に関する問題は深刻で市街地を離れた地方では水の供給もままならないのが現状です。私の住んでいるところも週に 1, 2 日しか水が出ないので、水が出る日

にタンクやバケツ等に水を溜めて使っています。また同島は貧富の差が激しく、テレビや冷蔵庫の家電がある家に住み、車を所有している富裕層もいれば、職がなく生活困難な状況に苦しむ人々など様々です。



飛び込みに興じる若者

ザンジバルならではの食べ物に関しては、ザンジバルピザやザンジバルミックスなどがあります。ザンジバルピザは小麦粉でできた生地に牛肉、人参、ピーマン、玉ねぎ、卵をミックスし、つつんで焼いたものです。ザンジバル風お好み焼きともよばれていて食べやすくとても美味しいです。ザンジバルミックスは、ゆでたジャガイモ、ムシカキ（牛肉の焼とりみたいなもの）やパジャ（ヒヨコ豆の粉を使ったインド風揚げ物）などをマンゴースープに入れて混ぜこぜにして食べます。スープが酸っぱい味付けになっており、暑い時などには最適です。



ザンジバルピザとサトウキビジュース

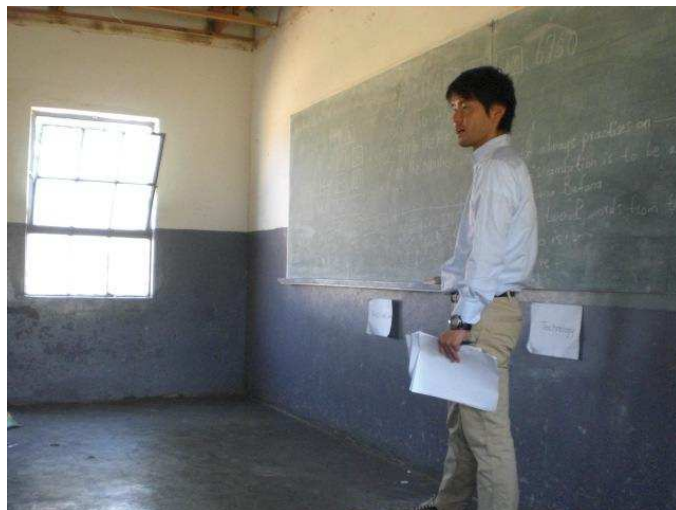
そんなザンジバルでの私の配属先は、「ミクンゲーニ技術中等学校」という政府系の職業訓練学校です。同校は 4 学年（日本の中学 2 年～高校 2 年程度）制で、学科は土木科、機械科、電気科、電子機器科、コンピュータ科で構成され、機械や電子機器整備の授業やコンピュータの授業、ザンジバルドア（彫刻がほどこされた木のドア）等の家具や木工を教える授業が行われています。私は当校においてコンピュータ科の実技教員として、同僚の先生やコンピュータ科の生徒にコンピュータの基礎知識、マイクロソフト、ネットワークやデータベースなどを教えています。またインターネットを利用できるようにネットワーク環

境構築や、学校情報を管理するデータベース等を作成するなどITを活用した環境づくりを行っています。IT（情報技術）はどの産業においても活用できると思っているため、同僚や生徒達にITの活用方法を示すことで、将来の選択肢をひろげる手助けができればと思い日々活動しています。



コンピュータの授業風景

う言語、文化、慣習、風俗等が違うことに不安に感じることもあった。しかし、家族は、私に南アフリカのルール、現地語、日常生活等を優しく教えてくれて。今では、当初の不安もなく楽しく生活することができ、ホームステイをして良かったなと改めて感じる。



授業風景

七色の民、南アフリカ共和国

24-1 南アフリカ 小学校教諭 吉野太郎 茂原市

(1) 隊員活動に関すること

南アフリカは、世界から見ても珍しい政策を行ってきた。それが、アパルトヘイト（人種隔離政策）である。1948年から1994年の終結まで長きにわたり国家が人種により隔離をしてきた。その影響は、約20年たった今でも残っている。アパルトヘイトによって、理数科教育の機会を十分に黒人に与えなかったため、その時、子供だった世代が大人になって教師になり、自分が理解していないことを児童・生徒に指導している。私は、このような現状を少しでも変えていくために、小学校で主に活動をしている。私は、小学校8校を巡回しながら、現地算数教員のサポート、現地算数教員の指導力の向上、現地教員の授業時間配分の改善、児童・生徒の算数の学力向上等を主な活動として取り組んでいる。

授業では、理解に時間のかかる児童・生徒に個別に指導をしたり、実際に授業をしている。また、授業中に現地教員に指導方法をアドバイスをし、それを児童・生徒に指導するように助言をしたり、一緒に指導方法を考えている。

児童・生徒に基礎的な計算能力を身に付けてもらうため、低学年から高学年にかけて、毎時間、基礎的な計算問題を取り組ませることを勧めたり、実際にプリント等を作成し取り組ませている。最初は、授業時間が十分に確保できないために難色を示す教員もいたが、基礎的な計算を取り組ませる意味を説明し、時間をかけて根気強く取り組むように話し合ったため、徐々に取り組む学校が増えてきた。特に低学年では、基礎的な計算問題を日常的に取り組ませる習慣がないため、低学年の現地教員には、必要に応じて理解してもらえるように話をしてきた。私は、任地でホームステイをしている。最初の頃は、日本と違

(2) 任国に関すること

① 食べ物

白人と黒人で食べる物が大きく違っている。白人は、一般的に欧米やヨーロッパの白人が食べる物とあまり変わらない。黒人は、トウモロコシの粉を水で混ぜて作るパップ、スタンプ、米を主食としている。それらと一緒に肉、野菜、豆をおかずを食べることが多い。白人もパップを食べるが一工夫する。ラザニアやティラミスの中に入れ、黒人が食べているパップとは違うものに変身をさせてしまう。



主食のパップ

② 一夫多妻制

一夫多妻制を認めている。しかし、一夫多妻制を活用しているのは限られた人かもしれない。なぜならお金の問題がある。家族を養っていくだけでも大変なのに、それが2、3つもあつたら、夫1人では支えていけない。また、価値観も変化しているのかと感じる場面があり、いろいろな人にこのことについて話を聞くと、1人の妻だけでいいという意見が多い。

24-1 ベネズエラ 音楽 小松佳央梨 千葉市

③ 男性と女性

黒人の中では男性が働き、女性が家事をすることが一般化している。首都や大都市に行くと、必ずしもこのことが当てはまるとは思わないが、少なからず任地では、この傾向が強いと感じることがある。それに加え、女性が働ける場所が限られていたり、就職が難しい等の問題も存在する。働きたいと願う女性がどんどん社会に進出できるようになったら、いろいろの面で変化が訪れるのかもしれない。

④ 同性婚

同性婚が法律上認められている。しかし、黒人は、それに関してあまり理解を示さない人が多い。任地でも、時々、同性愛者の方々を見かけることがあるが、家族や近所の人に話を聞くと理解できないこととして捉えている。国として進化はしているかもしれないが、国民がそれに理解を示し、付いてきているのかは疑問が残る。また、宗教が関係していることにより、理解されないこともあるのかもしれない。

⑤ 旅行

白人と黒人では、旅行に関する考え方が違うことがある。白人は、長期休暇になると国内外問わずに旅行に出掛ける。しかし、黒人は、長期休暇になっても家、親戚の家、近くのスーパー等に出掛けるだけである。これは、日常の土曜日、日曜日と同じ生活スタイルである。また、黒人は、家族の人数も多いことから旅行に出掛けると多くの出費が予想されるため、あまり旅行への関心が低いのかかもしれない。

⑥ スポーツ

南アフリカでは、様々なスポーツが行われている。特にサッカー、ラグビー、クリケットは人気である。人種によってスポーツの人気の割合が変わってくる。黒人には、サッカーが人気、白人には、ラグビーが人気、インド系の人には、クリケットが人気である。こういうことからアパルトヘイトの名残が残っているのかと感じてしまう。

その他

前記の通り、南アフリカは、アフリカの国々、世界から見ても珍しい政策を国家が行ってきた。これにより多くの負の遺産を残してしまったのかもしれない。国家が人種を分け、人々は考え、行動することも制限されてしまった。学校で活動をしていて、そのことを強く感じることもある。アパルトヘイトは終わったのかもしれないが、まだまだ残っている部分も多い。しかし、この国はアフリカの中で1、2位を争うほどの経済大国に成長したのも事実である。この国は、まだまだ成長をしていくための力を持っている。これから成長し、南アフリカの未来を背負っていく子供たちが少しでも、今の現状に変化を齎してくれることを願っている。



貧困の現状

配属先、活動について

私は、ベネズエラ・メリダ州・サンタクルスデモラにある青少年交響楽団でピアノ教師として活動している。さらに、7歳から9歳の音楽理論・ソルフェージュクラスも担当し、時間がある時はオーケストラ全体練習の補助指導にも携わっている。



配属先のオーケストラ

当オーケストラは、今、世界で話題になっているベネズエラの「エル・システム」のオーケストラである。「エル・システム」とは、国が支援しているオーケストラであり、全ての子どもが無料で楽器を借り、無料でレッスンを受けながらオーケストラ活動に参加することができる制度である。目的は音楽を通じた人間育成であり、創立された背景には国の治安の悪さが関係している。学校の授業が半日しかなく、貧しいが故に残りの半日で犯罪に手を出す子どもが多いこと。また、音楽の授業が行われていない学校が数多くあり、音楽を学ぶ機会がない子どもが多いといった背景がある。こういった背景から、オーケストラ活動に参加させることにより、音楽の素晴らしさを体感させることのみならず、犯罪から子ども達を守り、オーケストラという集団行動の場で協調性を身に付けさせようという試みが始まったのである。実際、エル・システムに所属している子どもは誰一人として犯罪に手を出していないという実績があり、ある犯罪沙汰だった子どもが音楽に生き甲斐を見つけ、犯罪人生から抜け出して新しい一歩を踏み出すことができたなど、エル・システムは数多くの子ども達に良い影響を与えている。

私の配属先のオーケストラには3歳から18歳の子どもが通ってきており、オーケストラ以外に、幼児音楽、合唱、クワトロ（ベネズエラの楽器）、音楽理論・ソルフェージュ、ピアノといったクラスも設けられている。現在、私が担当するピアノクラスは50名以上、音楽理論・ソルフェージュクラスには40名以上の生徒が在籍し、日々、子ども達の指導に奮闘している。特にピアノクラスは人気絶えず、すでに20名近くのウェイティングがかかっている程である。

私が活動当初から特に力を入れて取り組んでいることは、ソルフェージュ（音楽基礎能力）の指導である。日本と違って、キーボードさえも持っていないピアノの生徒が大半であり、このソルフェージュが身に付いているかいないかで、上達の進捗が変わってくる。これは、ピアノのみに限らず、全ての楽器に

関することである。よって、オーケストラ全体のレベルアップのためにも、引き続きソルフェージュの指導に力を入れていきたいと考えている。



ピアノレッスン

また、2・3月に計画されている短期ボランティア派遣（音楽指導者）による集中レッスンや、エルシステム・ジャパンとの関わり企画、日本文化祭の企画、日本大使館とロスアンデス大学主催の日本文化週間での演奏会等、残りの任期では、JICA ボランティアだからこその大きな企画を実行したいと考えている。

2012年11月11日付の日本経済新聞朝刊で、配属先のオーケストラについて書かれた記事が掲載されているので、1年以上経つものであるが、多くの方に読んで頂きたい。

ベネズエラについて

日本から見て地球の裏側にあるベネズエラは、日本と数多くのことが異なる。文化、習慣、人の考え方、生き方、街並み、生活環境…周囲を取り巻くあらゆるもの全てである。この国は、政治の影響が強く、大統領によって国が、国民の人生が変わるといっても良い程の影響がある。ベネズエラと言えばチャベス政権で有名な国であったが、私の任期中に亡くなり、現在はマドゥロ大統領が政権を握っている。この大きな変化があった時期は、国内が緊張状態で滞っており、危険でありながらも貴重な経験をするのができたと感じている。

私は、任地で5人家族の家でホームステイをしており、ベネズエラの生活をより体験することができている。そこでベネズエラに対し特に感じることは、家族の愛・絆の強さである。全世界において、家族の愛・絆は強いものであるが、この国、南米は特にその強さが表われていると感じる。家族に対し、周囲の人々に対し、大きな愛情をもって接しており、人と人との距離が近く、人との関わりをととても大切にしている。また、親切な人も多く、よく助けてくれる。この国にいて、そんな「人」の愛情や絆、関わり方といったことを多く学ばせてもらっている。

ベネズエラはJICA ボランティアが派遣されている中でも、比較的発展している国であり、ボランティア数も、全隊員合わせて現在9名と世界の中でもボランティア数が極めて少ない国である。しかし、貧困層が多く、特に酷い貧困地帯は治安が極めて悪く、ベネズエラ人でさえ立ち入ったら生きて帰って来られるかわからないという現実がある。ベネズエラは、世界有数の石油産出国であるが、その富による経済は、僅かな富裕層と多くの貧困層との差を作り出してしまったともいえるであろう。

数十年前は、日本よりも稼ぎがよく、多くの日本人がここベ

ネズエラに住んでいた。また、富裕層に限らず一般家庭のベネズエラ人も海外旅行へ行くなど、今よりも不自由な生活をしていたと聞く。しかしながら現在は、生活必需品のトイレットペーパー、牛乳、砂糖等、手に入らないものが多い。何故であろうか。何かを手に入れるために、1時間以上行列に並ぶことは日常茶飯事である。

ベネズエラの良さは、愛情深い人々だけではなく、カリブ海に面する海、大自然の素晴らしさもある。世界最長、標高差世界最大を誇るローブウェイ、世界で1番メニューの多いアイスクリーム屋さんは私の任地メリダにある。また、世界最長の落差を誇る滝エンジェル・フォールも見逃すことができない観光名所である。さらに、ベネズエラは美女大国として知られており、私自身も日々美しい女性に囲まれて良い刺激を受けている。

ストレス社会という言葉の似合わない穏やかな社会。臨機応変に対応できてしまう社会。愛情深い国民。治安が悪い国。あらゆるものが特殊な国。全て含めてこれがベネズエラであり、私の第二の母国なのである。

運命

私が現在、ここベネズエラで青年海外協力隊として活動している1番のきっかけは、大学の英語の授業で出された課題である。英字で書かれた記事を全訳するように出された課題は、私の運命を変えるものであった。その記事に書かれていた内容は、ベネズエラのオーケストラ制度「エル・システム」についてだった。「音楽を通した人間育成」これがまさに私がやりたい音楽だと記事を読んで衝撃が走った。しかし、この制度はオーケストラを通して行われているものであるので、ピアノ科の学生であった私は関わる事ができないと悟った。

その直後、タイミングよく青年海外協力隊に音楽という職種があることを知った。以前から青年海外協力隊というものを知ってはいたものの、音楽には関係ないものだと思い込んでいたのである。そして、早速募集されていた要請を確認してみると、偶然にも私の夢であったベネズエラのエル・システムのオーケストラから要請が出ていたのである。そしてさらなる偶然に、オーケストラ団体であるのにも関わらず、それはピアノ教師の要請であった。これは私のためにある要請だと思ってしまったのは言うまでもならず、早速応募をし、最終選考まで残ることができた。しかし、当時学生であった私は、ボランティアに必要な実践的経験が浅かった。このまま行ってしまうと自己満足で終わってしまう。ボランティアとしてしっかり活動するためには実践的経験が必要である。そう考えた私は、海外にある日本人学校で音楽教師になるという道を選択し、可否結果が出る前に選考を辞退することにした。しかしその時から、日本人学校で経験を積んだ後、必ず青年海外協力隊としてベネズエラへ行くことと決意していた。本来の協力隊の選考日程なら、日本人学校での任期を終え本帰国してからでないと受験できなかったのだが、これまた偶然が重なり、任期最後の年に限って選考日程が例年と異なった。よって、一時帰国して受験できることが判明したのである。そこで早速要請を見てみると、再びタイミングよく私が学生の時に受験したものと全く同じエル・システムのオーケストラから要請が出ていた。そして、応募し合格、無事に派遣され今に至っている。

派遣されるまでの偶然の重なりから、ベネズエラへ来ることは必然的であったと感じている。実際に派遣されて思うことは、色々と思ひ悩むことはあるが、ここへ来ることができて良かったということ。私が成長できる場所、そして、今後の人生に大きく影響を与えるような場所であったということである。最後に書き留めておきたいことがある。私は人のためになる生き方をしたい。一人でも多くの笑顔を作り出せるような生き方をしたい。常に周囲の人々への感謝の気持ちを忘れずに、残りの任期を全うしたいと強く願いながら、現在、日々活動に取り組んでいる。



ホームステイ先の家族

24-1 コロンビア 小学校教諭 藤岡摩矢 千葉市

コロンビアはどんな国？

コロンビアは、南アメリカ北西部に位置し、東にベネズエラ、南東にブラジル、南にペルー、南西にエクアドル、北西にパナマと国境を接しており、北はカリブ海、西は太平洋に面している。首都はボゴタ。コロンビアはコーヒー、エメラルド、バラそしてコカインの産地としても有名である。



メデジンの風景

赴任前に抱いていた、麻薬、ゲリラなどのからくる本国に対するマイナスイメージは、赴任して1か月でがらりと変わった。人々は、とにかく明るく人情味にあふれている。必ず挨拶をかわし「元気か？」と尋ねあい、コミュニケーションを大切にしている。踊りが大好きで、小さな子どもですら、大人顔負けにセクシーに踊る。また、ボゴタ、メデジンをはじめとする主要都市の近代的な街並みにも驚いた。大きなショッピングモールに、高層マンション、人々は身なりをきちんと整えて、優雅な

ランチの時間を楽しんでいる。

しかし、一方で、少し町を外れれば、物乞いをしながら路上生活を余儀なくされた人々、想像を絶する環境の下で生活をしている人々もいる。貧富の差がとにかく大きい国であるというのも、ここへ来ての第一印象であった。

日本の公開授業をコロンビアで

私の任地は第二の首都メデジンである。所属先は、メデジン市教育局の教員養成学校 (Escuela de Maestro) の算数科。ここでは、市内の教員の算数科における指導技術向上のための研修会等を行っている。

私の活動要請は、児童の学力向上と教師の指導力向上であった。着任後の3ヶ月はいくつかの小学校で授業の観察を行い、問題点を整理した。そこから感じたことは、コロンビアには他の先生の授業を見るという習慣がなく、先生たちの授業はそれぞれの我流で行われているということだ。誰がどのような授業をしているのかは全くのブラックボックスとなっており、先生たちの知識や経験の交流は図られていない。また「何を、どういう順序で、何時間かけて、どういう風に伝えるのか」ということを事前に熟考した授業計画もほとんど存在しない。そこで、授業計画や公開授業など、日本式の教育方法を定着させることが、ここでの主な活動内容となった。具体的には、コロンビアの先生と一緒に授業の計画を綿密に立て、指導方法の技術も伝達する。そして、他校の先生を招待して授業を見てもらい、その後、共有した経験について意見交換の場を設けるというものだ。

始まったばかりのコロンビアでの公開授業は、改善点が山のようにたくさんあり、定着させていくのにはまだまだ時間が必要だ。しかし、日本のやり方をどんどん取り入れていこうという意識が、一緒に活動に取り組む現地の人たちの中に芽生え始めていることは確かである。この国の良さを残しつつ、自分たちのペースで発展していく、その手助けができればと思い活動を行っている。



公開授業の様子

日本の教育現場から一度離れてみることで、教育を見つめ直す機会にもなった。幼少年期の教育次第で、国が良くも悪くも大きく変わっていくことをコロンビアで感じ、教育の持つ力と重要性を改めて感じている。メデジンで始まった公開授業が、いつかコロンビアの子どもたちが未来を切り開いていける力に繋がることを願っている。

23-4 パラグアイ 看護師 白川良美 市川市

パラグアイでの生活

パラグアイは南米のおへそに位置しており、国土はほぼ日本と同じ広さ。人口は約 670 万人程度。気候は亜熱帯地方のため、比較的、温暖な気候がつづく。夏には 40 度に上がることもしばしばあるため、手洗いたし洗濯物（ハンカチやタオル）などが 30 分ほどで乾いてしまうぐらいだ。そんな夏の暑さを和らげるため住宅構造が日本と少し違う。天井が高く造られているので、春、夏はクーラーがなくても快適に過ごすことができる。しかし冬になると、この家の構造があだとなり、寒い冬なのに家の中はもっと寒いという、なんとも忍耐が必要な季節になる。パラグアイの冬は最低気温 0 度、最高気温 10 度という日本の冬のように寒い日がつづき、雪が降りそうなものだが、ここでは雪が降ってくる。今年一度、小石玉の雪が空から降ってきた。近所の家の瓦や屋根に穴があき、車にはデコボコの傷跡がのこっていた。日本ではおそらくできない経験をしたが、もう降っては欲しくない。

私はパラグアイの首都アスンシオンから約 250 km 東にあるサンホアキンという村の保健センターで看護師として活動している。サンホアキンの人口は 17000 人程度だが、私の管轄する保健センターはそのうち約 5000 人程度を管轄している。その仕事内容は診療所のようなものである。妊娠婦と小児に対してのケアが多く、妊娠検診、乳幼児の予防接種の介助、低体重乳幼児の栄養改善、診療介助、歯科治療補助などである。

私の勤める診療所は医療設備も医薬品も十分になく、医師もいないため薬の処方箋の指示や、軽傷患者の手当てなどは看護師が行う。しかし重症患者に対しては看護師だけでは診られないため、応急手当をし、町病院に搬送しなければならない。しかし、この村から一番近い町病院まで車で 1 時間 30 分もかかる。それでは搬送時に急変してしまう恐れがあるが、どう対応しているかと聞いたら、もし搬送時に急変してしまったら、仕方がない。運が悪かったと思う。とのこと。何か不運なことがあっても、神の思召しとして、受け入れる。決して相手を責めようとはしない。とても温厚な人柄が多い国であるが、日本での医療体制とくらべてしまう私は、この思召しをととてももどかく感じてしまう。

今現在、救急体制は整っていないが、この状況を打開すべく、常勤医師の依頼を上司とともにに行っている。

ある日のこと、歯科治療の現場で 26 歳の女性の診察介助にしていた時、その人はなんの躊躇もなく、自分の歯を取り出していた。それをよく見ると、義歯だった。なんと彼女は虫歯で歯を失い 25 歳から義歯の生活をしているという。その日から、村の虫歯の罹患率を調べ始めた。各学校の児童対象に歯磨き指導と、虫歯の罹患率の調査を同時に行うようにした。すると、160 人中、虫歯を持っていない生徒は 1 人だけであった。

このことから、サンホアキンの虫歯の罹患率は 99.4% あることが分かった。また学校によっては、歯磨きや歯磨き粉をもっていない生徒がいたため、他機関の NGO に歯ブラシと歯磨き粉の支給の依頼を行った。初め、この歯ブラシセット支給に関して、NGO 機関は乗り気ではなかったが、歯ブラシを持ったことがない児童に対しては、歯ブラシを始めるきっかけとして、今が一番重要な時期だということを説明し合意してもらった。おかげで 2 か所の学校に歯ブラシと歯磨き粉の提供と健康教育

をすることができた。

彼らが習慣的に歯ブラシを使ってくれることを願うばかりだ。



学校での歯磨き指導

パラグアイの食文化

この国で代表とされる飲み物はテレレと呼ばれる冷茶である。昨今、日本でも話題になっているマテ茶もあるが、マテ茶は南米では広く飲まれており、このテレレは唯一パラグアイで試すことが出来る。飲み方はグアンパと呼ばれるコップにお茶葉をいれ、氷と水をいれた水差しから、お茶葉の入ったコップに注ぎ、家族や友人とともに回し飲みをしていくというもの。

このテレレは、食事と食事の合間に飲まれることが多く、仕事しながら、お茶代わりにも飲むときもあれば、休憩するときには必ず出てくる。

休日ではテレレをしながら何時間でも閑談ができるという。ここでの生活ではなくてはならない存在で、テレレのない生活は考えられないという。

わたしの同僚が上司とケンカしたとき、一緒にテレレは飲みたいくないと出かけてしまった。数日後、上司と仲直りしたか？と問うと、もう一緒にテレレを飲んでいるじゃない。とあっけらかんと話していた。一緒にテレレを共有することは、仲間である印でもあったと気付かされた。



テレレセット

家族との絆を深めるときもあれば、時には仕事の人間関係にもこのテレレが重要な役割をもっていると学んだ瞬間だった。

パラグアイ人の余暇の過ごし方は主に家族と一緒にテレレをすることである。家族団欒の場を大事にする、文化は見習っていききたい習慣のひとつだ。

また、パラグアイの主食はマンディオカと呼ばれる芋を主食としている。肉と野菜を煮込んだスープ（基本的に味付けは塩で、時々香辛料で香りづけをする）やタジャリンと呼ばれるスパゲッティと一緒にこのマンディオカを食する。生野菜を食べる習慣はほとんどなく、サラダはみじん切りにしたトマトとピーマンにご飯とマヨネーズが合わせたものがでる。このメニューでは明らかに炭水化物を多く摂取しており、また味付けが濃いため、さらにマンディオカ（主食）を摂取する。そのため非常に肥満が多い。2013 年のパラグアイの厚生省が提示したパーセンテージでは 5 人に 2 人が高血圧症の危険があるとされていた。

そこで高血圧症ならびに生活習慣病の予防を推奨すべく、患者パンフレットを作成した。目的は患者さん自身の病識の認識を高めるとともに、定期的な血圧測定と内服管理、全身状態の観察とした。講習会や各住民の家庭訪問の際に血圧測定をして、高血圧罹患者には、その場でパンフレットの作成と健康指導を行う。任地ではスペイン語の他、先住民族の言葉であるグアラニー語が話されるため、同僚に手伝ってもらいながら行っている。

現在、パンフレットの配布を開始してから約 3 カ月たつが、患者さんの中にはこのパンフレットを持って、受診してくれる方が少しずつ増えてきていることを嬉しく思う。

ていました。しかし今ではこの人と人との距離の近さ、心の近さがどこか心地よくなっています。

国民の 80～90%はイスラム教徒です。1 日 5 回の礼拝は、モスジット（イスラム教の礼拝堂）から流れるアザーンを知らせに行われます。アザーンとは、礼拝の時間に礼拝を呼びかける呼びかけのことです。1 日 5 回決められた時間に流れ、時計代わりとして人々の一日の生活上の節目ともなっています。公用言語はベンガル語です。東パキスタン時代、公用語を他言語に変えられそうになった際、自分たちの言語を守ろうと現バングラデシュの人々は立ちあがりました。このベンガル語は自らの命をにかけて守り抜いた言語なのです。話者数は世界で 7 番目となっています。



イスラム教の神学校マドラサに通う子供たち

食事はトルカリと呼ばれるカレーのようなものが主です。きれいな右手を用意したら、ゴハンとトルカリをまぜまぜ。スプーン・フォークは使いません。右手がスプーン代わりとなり、肉や魚の身もきれいにはがして食べます。イスラム教徒が大半を占める当国では、豚肉はご法度。街中で見かけることはありません。日本人は豚肉を食べることを話すと、嫌な顔をされることもしばしばあります。もう一つ現地の人が毎日口にするもの。それは、甘い甘いミルクティー。辛いトルカリを食べ終わったあとは、お口直しの甘いもの。紅茶にたっぷり砂糖と練乳をいれてかき混ぜれば出来上がり。辛い×甘い、刺激の強い味付けを好んで食べます。

人口密度世界一と言われるからには、もちろんたくさんの子供たちがいます。私の活動はその子供たちが健康に育つよう、安全かつすべての子供たち・母親になる女性たちに予防接種を提供する環境を作ることです。日本のように出生登録制度の整っていない当国では、子供が生まれても把握するシステムがうまく機能していません。子供が生まれたのにその情報が医療従事者の耳に入っていない、両親が予防接種に対しての知識や情報を持っていない、といった理由で無料で受けられる予防接種の時期を逃してしまうことがあります。すべての人が毎日を健康で元気に過ごすために、現地の人と手を取り合って活動を進めています。

日本と様々な違いがあるバングラデシュですが、とても似ているものもあります。それは国旗です。日本が白地に赤い日ノ丸に対し、バングラデシュは緑地に赤丸のデザインです。赤い円は昇る太陽、地の緑は豊かな大地を表しています。なんだからとても親しみが湧きませんか？非常に多くの方が、日本は『日



患者パンフレットの活用

パラグアイの生活は、毎日驚きの連続だけど、私ができることをやっていき、地域住民の健康増進のきっかけになってくれればと思っている。

23-4 バングラディシュ 感染症対策 樫田恵利 八千代市

私が派遣されているバングラデシュ人民共和国はインドの東部に位置し、国境のほとんどをインドと接しています。インドから流れてくるガンジス川は当国のベンガル湾へと注ぎこまれます。日本の面積の 40%ほどの国土におよそ 1 億 6000 万もの人々が暮らし、人口密度は都市国家を除き世界一とも言われています。私も赴任当初は溢れかえるような人の多さに圧倒され

出ずる国』と言われることを知っています。そのことにとても驚かされています。

バングラデシュの人たちの日本に対しての知識と比較して、日本の人たちのバングラデシュに対する知名度はまだ低いと思います。災害・交通渋滞・貧困といったマイナスなイメージが先行しがちな当国ですが、人々が支え合い、家族をなによりも大切に生活を送る、笑顔あふれる活気に満ちた国です。そういったプラスな面をより多くの人に知ってもらいたい、と願っています。



イスラム教の神学校マドラサの敷地内で行われている予防接種所にて

接種所からみえること

24-1 バングラディッシュ 感染症対策 實川路可 四街道市

バングラデシュで感染症隊員として活動している實川です。任地であるチッタゴン県は海とバングラデシュでは大変珍しい、山岳民族が暮らす山々に囲まれています。バングラデシュ第二の都市ですが、市内を外れれば田園風景が広がっています。

私の主な活動は、チッタゴン県内全14群を対象地域とし、村落部で行われている乳児と女性の予防接種所の巡回です。バングラデシュでは、群病院所属のフィールドワーカーさんが、予定表に沿って1か月8か所をワクチン、接種用具の入った重いカバンを持って巡回して接種を行います。村の診療所で行われる場合もありますが、多くの接種所が地元の民家や小学校をお借りしています。立派なお宅もありますが、息子さんが寝ているベッドの横でなんてこともあります。



接種所

この国は約90%がイスラム教徒と言われており、日本では知ることができなかったイスラム教女性の様々な面を見ることがあります。チッタゴンはこの国では珍しく、仏教徒も多く、

山岳民族はキリスト教の方も多いです。

イスラム教の宗教行事である断食月には、女性の破傷風の予防接種の接種率が下がります。注射も水分接種とみなされるようです。女子学生が真剣な顔でフィールドワーカーさんに「注射をしても断食を破ったことにならない？」と何度も確認しているお姑さん。地域差はありますが、若いお嫁さんは家族の誰かに付き添われてくることが多く、出産後もお母さんではなく、お姑さんや年配の女性が赤ちゃんを連れてくることが多いです。自分の子供の予防接種についても大切ですが、同じ年代の子どもをもつお母さん同士接種所で交流してほしいという気持ちから、無理にならない範囲でお母さんに来てもらう様促しています。

家に縛られてばかりかと思えば、母親たちは子供を連れて、1〜2か月ベラテ（親戚の家に滞在すること）に行ってしまう。接種所に来ない一番の理由がこれです。

注射に行くからベラテに行かない、ではなくベラテに行くから注射に行かないなのです。



接種所へ向かうワーカー

予防接種を提供する側の技術レベル等の問題もありますが、一番必要なのは受ける側、母親である女性たちの意識の変化では？と考えています。残り少なくなった活動期間ですが、同じ流れを経てきた日本のお母さんたちはどうして変化したのか？と考えながら活動しています。

セネガル リンゲール

24-1 セネガル 村落開発普及員 田中昌 我孫子市

私は日本から遠く離れたセネガルで活動しています。熱風と、家畜を連れた遊牧民族が闊歩する田舎町、リンゲール。美味しいものは牛タン、らくだ肉、ヨーグルトといった家畜・乳製品。家は水道が外に一個でトタン屋根。毎日外で水浴びをし、うずらとヤギを飼っています。踊りと挨拶と人と一緒にいる時間が好きなセネガル人に囲まれ、平和で元気な毎日を送っています。



ビデオ撮影の様子

1 協力隊との出会いはエチオピア

2009年3月エチオピア・ケニアの旅行。長距離トラックに小麦粉と一緒に出荷、もとい移動する中でアフリカに心を奪われる一方、行く先々で耳にする「水がない!」という言葉が気になっていました。その中、エチオピア・アワサにて当時水の防衛隊として活動されていた児島隊員、鈴木隊員からお話を聞く機会があり「水の防衛隊でアフリカ!」と決意しました。

2 活
現
水の
い、
の給
私
よう
発映
学校
個



ル給
を払
個々
まし
の啓
ない
ます。

そこで、同任地の視聴覚障がい児と協力隊員(ASUFOR)運営が円滑な委員会をモデルに、理想的な委員会運営のビデオを作成しました。これを使って組織運営にどこまで携われるか挑戦しています。

3 市場調査団にて池の水を飲む人の調査

セネガルでは、畜産業を生業とするプル族が遊牧をする際、池の水を飲むケースもあるようです。そこで、隊員主体で始まった協力隊市場調査団に参加しました。市場調査団は自身の活動や任地の課題をビジネス的な視点から分析し、活動の新たな可能性見いだす隊員のサークル的な活動です。そこでは、各民族の生活スタイル別に安全な水へのアクセスを調べました。今後は今までの隊員にはない取り組みとして、人の集まる移動市での啓発活動や、浄水タブレットの販売により水へのリスクを減らせるのではないかと考えています。

※ASUFOR ビデオ (ウオロフ語):

<http://www.youtube.com/watch?v=fUo5mRmsiGY>

※市場調査内容:

<http://jocvmr.webcrow.jp/report/index.shtml>

協力隊に参加して

“小さな小さなことの積み重ね”と“大きな大きな発見”

24-1 タンザニア 看護師 鎌田佳春 千葉市

<ムベヤ病院での活動内容>

「途上国の病院」そう聞いてどんな事を思い浮かべるだろうか？資金がない。物資が不足している。人手が足りない。おそらくこのような内容が思い付くのではないのでしょうか？(自分が働いている病院でも同様の問題を抱えています。)では、このような問題に対処する方法を挙げるとしたら？勿論、お金、医療機器、人材を投入する事が思い付くと思います。ここで突然「5S KAIZEN TQM(ゴエス - カイゼン - ティーキューエム)を投入する!」という言葉は出てこないでしょう。

これは何か？その言葉を説明するにあたって例え話をしたいと思います…。次のような経験をしたことがあるのではないのでしょうか？押入れに入りきらないほど物があふれていたが、工夫したらコンパクトに収納することが出来た。又は、日常で何か問題に直面し悩んでいたが、突然アイデアが浮かんで問題が解決。あんなに悩んでいたのに瞬時に解決してしまった。

ある材料とある材料を結びつけた結果、美味しい料理が出来上がった…。などなど。おそらく思い当たる事があると思います。そして、この状況で共通に使った、この5S KAIZEN TQMに活かされています。何でしょうか？そう、それは『頭』。これを最大限活用しよう!そして、頭を使って思いついたアイデアを偶発的な産物ではなく、必然なプロセスで生み出せる様に姿を変えた方法が5S-KAIZEN-TQM。少し大袈裟に表現した感じもありますが、「物やお金がない=諦める」ではなく、「物やお金がない、ならば考えて頭を使おう」という発想の転換を形にしたものとして大きくとらえて頂ければと思います。そして、この方法をガイドラインに基づいて、限りある病院資源(人材、物資)を、タンザニア人自身で考えて最大限活用出来る様にすることが目標であり、それが自分の役割。

では、実際に自分の活動している病院はどのような状況になっているのでしょうか？例えば、倉庫や棚の中は物品整理ができていない。必要な物が不足し、使用頻度の少ないものが溢れている。敷地内はゴミが散乱している。スタッフの人数に合わせた業務バランスが不均衡。診察の順番が守られない。ゴミの分別が出来ない。カルテの記載が漏れる。などが挙げられます。そしてこのような問題を「5S-KAIZEN-TQM」で解決していく。必要な物やサービスを、必要な時に、適切な状態で提供出来る環境を作っていく。



公庫の様子。左側が5S前、右側の写真が5S後。

乱雑に置かれたものが、綺麗に整えられている。

ガイドラインに載っている具体的な方法は、5S(「整理」、「整頓」、「清掃」、「清潔」、「しつけ」)。この順序に基づいて病院内を整えていく。端的に言うと、何が何処にあるのか？(薬、注射器、針はどこ?)必要な物、必要ではないものに分け、壊れた機器、使われていない道具、使用期限切れ、余剰在庫、在庫切れを減らしていく。この整理整頓された状態を常に保つために掃除の習慣化し、ルールを決め、それをみんなで共有し守っていく。(『みんなで』という所が大切。)そして、最終的にはこれを文化として確立していく。

物が散乱していた環境から徐々に整ったモデルルームの様な状態に変化していく。業務の空き時間を利用して、無理なくゆっくりとゆっくりと進めていく事を心掛ける。収納方法、物品配置の工夫、空き箱の再利用などみんなが考えたアイデアが形になり、これが原動力となり、院内全体へ波及、浸透していく。実際には「自分の病棟も手伝ってほしい。」「物品管理をする一覧表を作ってほしい。」などと言う様な声が掛かる。

物の管理が落ち着いたら、次は日常業務の見直しに入る。普段仕事をしていて問題になっている事を解決していく。上記の様に外来の待ち時間が長い、スタッフの配置のアンバランスなど。これをどう解決していくのか？端的に言うと、「なぜ?」「なぜ?」と言う問いを繰り返して図式化(原因を探る地図を作る様な感じ)。そして、原因の根幹を追究し効果的な方法と考える事を実行。上手く行かなければ再度考え直す。この連続。



カルテの並べ方を説明



市場の様子

皆は色々と考えを巡らせていく（要するにブレインストーミング）。そして何度も何度も失敗しながら学んでゆく。この取り組みを通じて、今までは問題をそのまま放置して、「仕方がない。どうにも解決出来ない。」という意識から徐々に変化の兆しを見せ、「どうにかしたい。」と、考える様になってきている。問題意識を持ち続ける事が定着し始めている。私自身この変化は、問題を解決する方法が「お金」だけではなく、「頭」(5S-KAIZEN-TQM)を使って打開する事も出来るのだ、という意識の転換の証であると実感しながら活動が続けている。

<食事を通して>

「ごはん、何食べた?」「ん〜と、ご飯とみそ汁と…。」「私は、サンドイッチとコーヒーと…。」こんな会話が懐かしい。ここはタンザニア。舗装路がまだ少なく凹凸の大地で店を構えている軒先に食事が並ぶ。油でじっくりと揚げたパン、炭で焼いたバナナ、握りこぶし大の骨付き牛肉のスープ、砂糖を直接舐めていると思うほど甘〜い紅茶、顔の大きさ程の卵とじポテトフライ（言うまでもなく、かなりカロリーは高い）。ご飯と肩を並べてタンザニアで主役（主食）を務めるウガリ（トウモロコシの粉をお湯で練り上げたもの）。

当初はこれらの食べ物に興味津々。『日本とは違う珍しさ』や『これに挑戦してみよう!』と言う好奇心がソースやスパイスの様に感じられ、味に彩を加えていた。「へ〜。何これ?」「毎日これ食べているんだ〜。」「面白い!」まるで旅人の様な非日常の感覚。

だが、次第に今まで見ていた風景が違う姿に変わる。「またこれ?」「ハエが沢山いるんだけど…。」「もう十分…

「何で他の物がないの?」気が付くとタンザニアの食事から目を反らし、普段日本で食べていたものを探していた。だが、当然そのような物はない。お腹が減っていても現地の料理を受け付けられない時期が訪れた。笑顔が少なくなり、食べたいと思う意欲が段々と低下していく。どうしよう…。はあ…。

そうなると自炊へ移行。市場へ買い出しに出掛ける。トマト、玉ねぎ人参、キャベツ、ピーマン、茄子、菜っ葉類、と豊富。（オクラが日常的に売られていたのはびっくり。直ぐに飛びつきました。）果物はオレンジ、パイナップル、パパイヤ、スイカ、マンゴーなど。冷蔵庫はなく常温で並ぶ。そして、牛肉も常温。1mほどの肉を吊るし売り。必要な量をナイフと斧を使って豪快に骨ごとカット。鶏肉がほしい場合はにわとり小屋へ。生きたまま購入し自分で解体するのが基本。野菜炒め、野菜スープこれに肉を付け加えて料理。お米を鍋で炊いて出来上がり。自炊が一番!?

しかし、そう思っていたはずが、不思議なことに、暫くすると、現地の料理が恋しくなってくる。今まで敬遠していた食べ物の匂いが、逆に引き付けられる魅力的な香りに変化してくる。気が付くと再び現地の食堂へ足を延ばしている。今まで拒んでいた現地の料理がとても懐かしく、そして美味しく感じる。毎日でも食べるようになる。時には「今日はもうないよ!」そう言われて、「なぜ?」と、逆にイライラしてしまう事も。食事に対する抵抗がなくなっている自分に気が付いた。しかし、それだけではなく、こうなってくると食事だけでなく会話をしていても、仕事をしていてもタンザニアを身近に感じる様になっていた。とても自然に、極々自然にみんなの中に入り込んでいる自分がいる感じがした。



フライドポテトに野菜をかけた、代表的な昼ご飯のひとつ

現地と同じ食事を食べ、食卓を囲む。自分の中では食事がきっかけだったが、現地の生活習慣に適合した事がタンザニアを身近に感じる様になったのだろう。異文化の中ではこの様な積み重ねが現地との同化に欠かせず、そして相手を理解する最初の一步は現地の生活習慣に慣れることから始まるのかもしれない。これが旅人から現地の住人へ（非日常が日常へ）変化するプロセス。そう感じた。

<異文化経験に感謝>

「ケショ!」「ケショ!」(スワヒリ語で「明日」を示す言葉)。職場でも、街中でも何度も耳にする。「明日…。そうですか。分かりました。では明日!」そして翌日、声を掛けると再び「ケショ」。また、別の場面では、「ナクジャ ササヒビ!」(スワヒリ語で「今すぐ行くから!」の意味)。そして、30分〜1時間待つことも。急いでも行き交う人々と会話、会話、そしてまた会話…。また、日本では1日で出来る事も、タンザニアでは2〜3日、又はそれ以上掛けて物事が進んで行く。その他、予想していた事と全く違う展開になっても時間通りにいかなくても、全く穏やかな雰囲気でも過ごすタンザニア人。本当に

何事もなかった様に時間が流れている。
一方その様な状況に対して、「今すぐ!と言ったのに。」「話と違う!」「仕事が進まない…。どうしよう。」「遅れる!」と、その状況に対して大混乱に陥っている自分がタンザニア人の隣にいる。

なぜこのような事が起こるのか?色々と考えてみた。そして、どうやらその答えは、タンザニアでも日本で暮らしている時と同じ感覚、基準ですべてを見つめ、日常を過ごしているからだ、と、気付いた。例えば、時間、約束は守る。もしも変更が必要ならその旨を事前に伝えトラブルを避ける。また、仕事の進め方も、「この方法が効果的だ。」「こうしなければならない。と、日本で自分がやってきた方法が前提で物事を考えていた。そして、この様な事は国が違っても暗黙の了解であると思い込んでいた。勿論、自分では相手を十分考慮して行動したはずだった。しかし、気が付くと、自分が日本で進めてきたペースを相手に求め、押し付けていた。相手を理解している行動ではなかった。

国が違えば生活習慣、文化の違いがあり、それを学び、理解する事が大切であるということは知っていた。だが、それは知ったつもりで過ぎなかった。決定的なあるものが足りなかったのだ。そう、それは異文化を実際に経験するという事。それに気が付き一日一日の行動を慎重に分析して過ごすようにした。

これでは相手に伝わらない。これでは誤解を招く。ではどうすれば…。今までにない経験なので試行錯誤の連続。ゼロからのスタートなので思うようにいかない焦りと混乱で毎日が過ぎていく。これが異国で暮らすという事なのかと痛感した。物事に慣れるには時間が掛かる。仕事、習い事、言語…。短時間での取得は難しい。文化、習慣というのはその極み。長く寄り添う事で自分の身体の一部になっていくもの。大木も同様にその太い幹になるまで長い長い年月を掛けてゆっくりとその姿になったはず。他の植物も然り、種を植え、芽が出て、徐々に成長し花を咲かせ、実を付ける。焦らずに行こう!そう考えられるようになり、徐々に落ち着きを取り戻していった。上記の食事の例もあるように自分の状況を客観的に見ることも徐々に出来る様になった。

異国で1年半近くが経過したが、まだまだ毎日新たな発見がある。日本にいた時は不自由のない生活だった。一方、現地の生活水準での暮らしは、思い通りには行かず、都合が良い時も都合が悪い時もそこから逃げる事は出来ず、また日本では経験のない出来事に遭遇する。この経験を通して日本の様な先進国の中で、短時間で習得できる技術の開発や便利さ、快適を追求するだけではなく、途上国の自然なありのままの流れの中に身を置き、長い時間を掛けて物事を見つめ、そこから何かを学んでいくことも大切であると感じている。異文化から大切なことを学ぶことができ、感謝、感謝の毎日である。

4. 著書紹介 成瀬猛 OB 著 ~マイウェイ国際協力 中東・アフリカ・アジア 30年の軌跡~

当OB会の副会長であり、現在は麗澤大学で教鞭をとっている成瀬さんの著書「マイウェイ国際協力: 中東・アフリカ・アジア 30年の軌跡」が、2013年の秋に出版されました。そこで、本の内容について、成瀬さんに紹介してもらいました。

JICAの在職期間25年と、青年海外協力隊派遣期間2年、JICA専門家派遣期間3年、民間海外駐在期間1年を総計すると31年間も国際協力に関わらせて頂きました。その間、在外にはシリア、イラク、エジプト、バングラデシュ、ケニア、パレスチナと通算で約17年間もの長きにわたって、国際協力の最前線で仕事をする機会にも恵まれました。

4年前にJICAを早期定年退職し、海外での人づくりの現場から、念願でもあった、国内の若者を育てる現場に転職しました。若者達を育てる為には、私自身が学生達にとってのアイコン的な存在にならなければなりません。その為、夏休み、春休みに、学生達を連れて海外スタディツアーに出掛け、時に、学生達の目に『教員』としてではなく、『国際人』として我が身を晒してきたつもりです。しかし、スタディツアーに連れて行ける学生は全体の中の僅か一部です。多くの学生は経済的理由等で行きたくても行けないのが実情です。また、授業の中で、映像を屈指し、どんなに情熱を込めて話をして、90分間で私の辿ってきた31年間を語り尽くすことも出来ません。

そんな思いを凝縮させて書いてみたのが、この度、出版に至ることが出来ました『マイウェイ国際協力』です。実は、初稿段階では、あまりにも思いが強く出過ぎた部分もあり、『言い過ぎ・・・』と思える部分は、結構、マイルドな形に書き変わっていますが、それでも読者の中には『まだ言い過ぎ・・・』と感じられる方も居ると思います(笑)。

伝えたい思いは、情熱とチャレンジ精神でしょうか!これを読んでくれた大学生やJICAの若手職員に少しでも何か感じて貰えるものがあり、その中から世界で活躍する日本人材が生まれてくれれば、本書を手掛けた甲斐があったと思います。

昭和52年度シリア派遣 成瀬 猛



【著者略歴】 成瀬 猛

1977年青年海外協力隊員としてシリアに派遣。その後、イラク、エジプトでの長期滞在を経て1985年JICA職員となり、1990年からJICAバングラデシュ事務所(3年)に勤務。1999年ケニア事務所次長(2年)、2001年パレスチナ事務所所長(1年)、イラク戦争勃発後一時帰国、2003年から再度パレスチナ事務所所長(5年)を務める。2008年JICA国際協力客員専門員、2010年JICAを退職後、麗澤大学外国語学部教授、現在に至る。専門は、国際協力論、中東地政学、平和構築